



英語、通じる、通じない？ 上海の英語事情

上海は外国人が多く暮らす国際都市。しかし、街中では英語より普通話飛び交う場面が多い。その背景や、上海人と英語の距離感を探ってみよう。

英語は、中国も日本も「話すのが苦手」

EF EPIデータで見る 各国の英語習熟度

EF EPIは、世界各国・地域の英語能力を比較するため、語学教育会社EFが毎年発表している英語力指数。EFのオンライン英語テスト受験者の結果などをもとに算出され、各地域の英語学習傾向を知る目安として使われている。

中国 (2025年) 464点 / 世界86位		日本 (2025年) 446点 / 世界96位	
技能別		技能別	
リーディング	492点	リーディング	454点
リスニング	436点	リスニング	437点
ライティング	455点	ライティング	394点
スピーキング	448点	スピーキング	393点

上海 (2025年) 508点	
中国・都市別ランキング	
1位 浙江省杭州市	515点
2位 北京市	514点
3位 江蘇省南京市	512点
4位 湖南省長沙市	511点
5位 上海市	508点

上海英語「あるある」

英語で話しかけているのに、ずっと普通話で返ってくる

中国では、地域によって上海語や広東語など、さまざまな言葉が使われている。同じ中国人同士でも言葉が通じない場面があり、その際は普通話で解決するのが日常だ。そのため、自分が話す以外の言語を聞くと「普通話なら伝わるかも」という感覚で、まず中国語で対応する人も少なくない。



英語が通じる人は、押しなべてネイティブクラス
近年は翻訳アプリやAIツールが普及し、日常会話レベルなら英語を無理に話さなくても対応できる環境になった。そのため、実際に英語を使う機会がある人と、そうでない人の差が大きい。普段から英語を使う環境にいる人は、発音や表現も自然で驚かされることも。

「中国はあまり英語が通じない」という印象を持つ人もいるかもしれない。しかし、EF EPIのデータを見ると、中国では英語学習への取り組みが決して低くはない。2025年版では、中国は464点で世界86位、上海は508点で中国の都市別ランキング5位となっている。一方、日本も446点で世界96位。両国とも、リーディングは比較的高いものの、スピーキングは低めという共通した傾向が見られる。

中国では学校教育を通じて多くの人が英語を学んでいるが、試験で求められる英語と、実際に会話で使う英語には差があるようだ。上海は中国平均を上回る英語力を持つ都市だが、数字だけでは日常生活での「英語の通じやすさ」までは測れない。

英語を学ぶ環境と、英語を使う環境。その違いが、上海の英語事情を読み解くポイントになりそうだ。

多言語社会が生んだ普通話文化
中国で英語を使っても、中国語で返ってきて困惑したことがある人も多いのでは？「外国人＝英語」とならない理由の一つに、国内の多様な言語環境がある。中国には56の民族が暮らし、漢語だけでなく地域によって大きく異なる言葉が存在する。上海語、広東語、四川語など、出身地が違えば日常会話で難しいケースも珍しくない。

そのため、中国では普通話（標準中国語）が共通語として広く普及してきた。2015年の中国教育部の調査では、普通話の普及率は約70%に達している。つまり多くの中国人にとって、相手が違う言葉、自分が聞き取れない言葉を話すことは日常の延長にある。

外国人相手でも、まず普通話で伝えてみるという対応は、こうした言語環境の中で自然に身についたものなのかもしれない。

上海の英語教育事情



▲小学1年生の教科書。フレーズをそのまま覚えていく



▲小学5年生の教科書。古代ローマの紹介文

小学1年生から始まる

上海の公立小学校では、英語学習は小学1年生からスタート。日本の小学校では3年生から外国語活動が始まるため、開始時期はかなり早い。さらに、低学年から日常会話や簡単な文章表現を学び、学年が上がるにつれて内容も高度になっていく。

ABC...から学ぶのではない

上海の英語教育は、アルファベットの書き取りから始まるイメージとは少し違う。初期から「What's your name?」「How old are you?」など、実際の会話で使うフレーズを聞いて話す練習を重視。読む・書くだけでなく、使える英語を意識した内容になっている。

バズってる、英語空耳中国語

What the dog doing?
(犬はなにしてんだ?)
→ 我的刀盾
(wǒ de dāo dùn、私の刀と盾)

もともと英語圏で流行っていたミーム「What the dog doing?」が中国に伝わり、「我的刀盾、に聞こえる」と話題に。謎のイヌのキャラまで誕生した。



▲「我的刀盾、のイヌ



Too young, too simple
(若すぎ、単純すぎ)
→ 図樣圖森破
(tú yàng tú sēn pò、若くて単純すぎる)

中国ネットで広まった英語の空耳ミーム。「Too young, too simple」を中国語の発音に合わせて「図樣圖森破」と表記したもので、元の意味を残しつつ、まるで四字熟語のように見えることから話題に。相手を「まだまだ経験不足」とからかうネットスラングとして使われた。

会話重視へ変わる英語教育
上海の公立小学校で使われている英語教材は、上海市教育委員会の指導のもと、上海教育出版社などが制作した「牛津（オックスフォード）上海版英語」。長年、上海の英語教育で広く使用されてきた教材で、近年の改訂では、実際のコミュニケーション能力を重視する方向へ変化している。

新しい教材では、単語や文法を覚えるだけではなく、会話の場面を想定した練習が増加。「聞く・話す・読む・書く」の4技能をバランスよく伸ばす構成となっている。そのため、低学年でも自己紹介や日常会話など、実際に使うことを意識した内容が登場。早期から英語でコミュニケーションを取る力を育てる方針が見える。

もちろん、学校によって進度や指導方法には差があるが、上海では英語を「試験のための科目」から「使うための言語」へ変えようとする流れが進んでいるようだ。

ネットミームも多言語化？
中国のネットを見てみると、中国語だけでなく、英語や日本語を元にした不思議な表現に出会うことがある。今回紹介した「我的刀盾」や「図樣圖森破」もその一例。外国語の音を中国語の漢字に置き換え、意味のズレや語感の面白さを楽しむネット文化が生まれた。

一方で、日本語由来のネット用語も存在する。例えば日本語の「ハキム」が「ハチミツ」などの音を中国語風に表現した「哈机米」のように、アニメやゲーム文化を通じて広がった言葉も。

こうした表現は、単なる翻訳ではなく、外国語の音を中国語の感覚で遊ぶもの。中国のネット空間は、実はさまざまな言語や文化が混ざり合う「多言語ミックス空間」なのだ。英語が通じる、通じないだけでは見えない、中国の国際的な二面と言えるかもしれない。